人間関係論(その1)　親子関係について

Ⅱ　立ち直った家庭内暴力児の事例から学ぶもの

山　田　順　子

The Study of Human Relations—No.1— Relationship between Parents and Children

Yoriko YAMADA

Last paper is also on the study of young people using violence "only" against their own family. The difference from the other "problem children" or "juvenile delinquents" are obedient and polite to except their own family, and on the surface, their spiritual and material environment is not bad. They have high intelligence and good school records. I think some of the important causative factors of this problem are the personality of their mothers' lack receptivity which is indispensable of children, their fathers' status without authority over their families, and their narrow, unbalanced, and not flexible sence of values. But even if they become aware of faults of their own personality and inappropriate attitude to their own children, it is very difficult to transform their characters and attitudes immediately.
This paper is on the study of recovered cases. I present three cases for considering what is necessary for them to recover. Extensive human relations are necessary for them to recover and various human relations is also prevention of violence in the family.

§はじめに

前回に引き続き，家庭内暴力児の親子関係について見ていきながら，人間関係というものについて考えたい．

今回は特に立ち直った家庭内暴力児のケースを紹介しながら，家庭内暴力児が立ち直るために必要なものは何かということを考えてみたい．

〔**事例1**〕

A男，19歳，大学浪人
父親，54歳，高校卒，会社員
母親，52歳，高校卒，主婦
兄，　22歳，大学生

父親は，無口で短気な性格．口を開くのは

癇癪をおこして家族を怒鳴るときだけだという．A男には，家族が笑顔で話し合ったという記憶がない．

母親は，恋人が戦争で死んだため仕方なく父親と結婚したといい，結婚以来やさしい言葉ひとつかけてくれたことのない夫にあきらめにも似た気持を持っていると話す．いつも暗い表情をしており，口数も少ない．

両親の夫婦仲は，悪いというよりむしろ冷え切っているという感じをいだかせる．

A男の兄は，2浪して2年前に大学に入り，入学後家を出てアパートで暮らしている．

母親によると，体が弱く泣いてばかりいた兄に比べて，幼い頃のA男は病気ひとつせず育てやすかったという．

A男は小学校・中学・高校を通じて，特に問題を起こすこともなく，どちらかというとおとなしい生徒で，成績は中の上といったところであった．中学と高校ではバスケット部に入って，正選手として活躍していた．

A男は4つの大学を受けたが，合格間違いなしといわれていた大学にも落ちて浪人が決まり，4月から予備校に通い始めた．同程度の成績だった同級生やクラブの仲間のほとんどがどこかの大学に合格して大学生になったことは，A男にとっては大きなショックだった．それでも7月の初めまでは毎日予備校に通っていたが，勉強が思うようにはかどらず予備校で行なわれた模擬試験の成績もふるわなかったことからくる焦りや不安，単調な受験勉強にあけくれることへのやり切れなさなどからイライラした様子を見せるようになり，予備校も休みがちになった．

心配した母親が「そんなふうだと，お兄ちゃんみたいに2浪しちゃうわよ」と言ったところ，今まで見せたことのないような剣幕で「うるさい！」と怒鳴り返されたのが発端だった．それからは，ちょっとしたことにも腹を立てて物を投げたりつかみかかってきたりするようになり，母親は体中アザだらけとなり，気の休まる暇もない毎日にノイローゼ気味となった．

暴力をふるうのは母親に対してだけで，それまでにもほとんど口をきいたことがなかった父親に対しては，意識して顔を合わせるのを避けているようだった．母親は，夫に話したところでどうなるものでもないし，頼りになるような人でもないと思い，何も話さなかった．

A男に転期がおとずれたのは，10月も半ばに入った頃である．

父親と顔を合わせるのを避けるために早目に夕食をすませたあと，いつものように母親にひとしきり悪態をついたA男は，夕刊に目を通しているうちに急に思い立って映画を見に出かけた．その帰りの電車の中で，酔っぱらいにからまれている若い女性を一緒に助けたのが縁で，S氏と知り合いになる．

S氏は，大学卒業後10年間勤めた一流企業を退職し，4年ほど前から夫人と2人で自家製のケーキを売る店を開いている．

「浪人中なのだけれど，将来への見通しも持てないし，勉強にも身が入らなくて」と話すA男を，S氏は「一度店に遊びに来ないかい」と誘い，また「店が気に入ったら，君の気分と生活のリズムの転換も兼ねて，バイトしてくれてもいいよ」と言ってくれた．

毎日のように母親に暴力をふるいながらもこのままではいけない．生活のリズムを変えなければ，という気持になっていたA男は，早速その翌日たずねていったS氏の店の明るい雰囲気が気に入ったこともあり，店番のアルバイトをすることにした．

応対の合間に，素早く参考書を開いて要点を要領よく頭に入れていくというのは，一日中机に向かっているよりかえって新鮮で，しかも家に帰ってから床に就くまでのまとまった時間にも，以前より勉強に集中できるよう

になった．

店では，あるサークルでお菓子作りを教えているＳ夫人の生徒でもある女性４人が，ケーキを焼く手伝いなどをして働いていた．

単調なＯＬの仕事にあきたらず，何か技術を身につけたいと思い，大好きなお菓子作りを選んだという22歳の女性．

経済的な事情で大学には進学できなかったが，税理士になることを目指して，昼間はＳ氏の店で働き，夜は経理学校の夜間部に通っている19歳の専門学校生．

高校の数学教師の夫と高校１年生の息子の３人家族の主婦で，中学２年頃から反抗的になった子どもに悩まされているという人．

そして，Ａ男と同年の重度の身体障害者の弟を持つ28歳のタイピスト．

Ａ男は，この女性からいろいろ話を聞き，重度の身障者が生活している施設へも連れていってもらい，言葉では言い尽くせぬほどの衝撃と感動を受けた．

また，進学校といわれる県下の名門高校から目指す国立大学に合格し，希望通りの会社に就職でき，かねてから働きたいと思っていたコンピューター部門に配属されて，かつてはエンジニアとして第一線で活躍していたＳ氏から，現代社会の中でコンピューターというものの持つ能力や限界そして危険性，会社という組織の中で働くことの面白さと虚しさ，脱サラを決心するまでの迷いや不安，小さな店を開いて地域に根をおろしていくことのむずかしさ，などの話を聞き，目を開かれるおもいがした．

このような日々の中で，受験勉強や浪人生活に対する嫌悪や焦躁も薄らぎ，自分の置かれている状況や将来のことも冷静に考えることができるようになり，精神的にも落ち着いて，母親に対する暴力もおさまってきた．

そして，Ａ男は，Ｓ氏を始め大学生である兄やクラブの先輩などからもいろいろ話を聞き，よく考えた末に，某私立大学の経営学部への合格を目標に，残る３ヵ月を受験勉強に専念することにした．

Ａ男の決意を聞いて安堵した母親は，自分がやめると店に迷惑をかけるのではないかと心配する息子にかわって，Ｓ氏の店で働くことにした．やがて，母親は，店で働く女性たちと悩みを話し合ったり励まし合ったりするようになり，ケーキづくりの手伝いも始め，表情も明るくなった．

Ｓ氏から激励の電話を受けたりしながら受験勉強に打ち込んだＡ男は無事合格し，簿記一級の検定合格を当面の目標として勉強しながら，元気に大学に通っている．

〔考察〕

§事例１について

Ａ男が立ち直る最初の契機となったのは，Ｓ氏との出会いであった．その出会いはほとんど偶然と言い得るようなものだったが，この頃にはＡ男も，このままではいけない，なんとか生活のリズムを変えなければ，という気を強くしていた．こういう素地があったからこそ，偶然とも言えるような出会いを契機として立ち直っていくことができたのである．

Ａ男が立ち直っていく過程を見ていくと，本人の努力もさることながら，運がよかったという面も否定できないであろう．

Ａ男に限らず，外では「よい子」を演じながら家の内で暴力をふるっている子ども達は誰しも，心の内では，なんとかこの苦境を脱したい，立ち直りたい，と願っているはずである．だが，彼らが皆Ａ男のような幸運に恵まれるわけではない．

§困難な本人との接触

彼らには，家庭の外に目を向け家族以外の人と積極的に接触しようとするような者は少ない．まして，自ら進んで精神科医や相談機関などを訪ねる者は，ごくわずかである．

彼らをなんとか立ち直らせたいと日夜心を砕いておられる精神科医やカウンセラーの方達から，「彼らのケースを扱っていて何よりもどかしいのは，なかなか直接本人に働きかけられないことだ。」という声を聞くことが多い．

§ 困難な養育態度の変容

家庭内暴力児の事例を調べてみると，両親のそれぞれのパーソナリティーや養育態度，夫婦仲などに問題があり，それが現代社会の学歴偏重の風潮などと相まって問題行動の発生を引き起こしたと考えられるものが多い．

学歴偏重という問題の背後には社会的な背景があり，その変革は直ぐには実現しそうもない．そこで，本人に接触できない場合，医師やカウンセラーは，両親との面接を通じて親の養育態度やパーソナリティーにも問題があることを示唆し，まずそれらを改善してもらうように働きかけるのである．

だが，良きにつけ悪しきにつけ，親のパーソナリティーはその人なりの何10年かの歴史の中でかたちづくられたものであり，親としての養育態度も多かれ少なかれそのパーソナリティーに基づく側面があるから，どちらもそう簡単に変えられるものではない．また，家族には10数年かかってできあがったそれぞれの役割というものがあり，一歩家に入ると無意識のうちにそれを演じてしまうものである．

では，両親の性格や養育態度などに少なからぬ問題があり，しかもすぐにはそれらを変えられそうもないという場合，いったいどうしたらよいのだろうか．毎日家族に暴力をふるいながらも，心の内では何とか立ち直りたいと願っている子ども達に，どうしたらよりよい援助ができるだろうか．

このことを考えるためには，まず，彼らが立ち直る際に最も必要だと思われるものは何かということを，明らかにせねばならないであろう．

そこで，もう少し，立ち直った事例を見ていくことにしよう．

〔**事例2**〕

B子，15歳，高校1年生
父親，47歳，大学卒，医師
母親，42歳，大学講師
妹　，12歳，中学1年生

医師である父親は，B子が中学2年の時に他県の病院へ転勤することになり，単身で赴任し，それ以来週末に家に帰ってきて土曜と日曜を家族と過ごすという生活をしている．

父親は3人兄弟の次男で，明るく快活な性格である．

母親は，大学の英文科を卒業後，4年ほど母校の研究室で助手をしていた．B子が生まれてからも勉強は続けており，B子の妹が小学校に通うようになってからは非常勤講師として短大で教えている．

母親は理性的な性格であるが，どこか冷たい感じのする人で，気さくで陽気な父親とは対照的である．

今は大企業の顧問をしている父方の祖父はかつてはその会社で重役をしていた．また，父方の祖母は格式ある家柄の出身で，ごく普通のサラリーマンの家の娘である母親との結婚には，2人とも強く反対したという．

父方の祖父母は近所に住んでいるが，今でもB子の母親とはうまくいっていない．

母親によると，B子の生育歴については別に特筆すべきこともなく，ごく普通の子どもだったというが，姑に批難されないようにと，小さい頃はかなり厳しい躾をしていたようだ．

また，母親は，できれば卒業後ずっと大学の研究室に残って勉強を続けたかったのだが，B子が生まれたので勤めをやめざるをえず，しかもB子や妹の世話に時間をとられて思うように勉強ができないということに，内心か

なりの焦りや不満を抱いていたという．

母親は，「わたしは子どもにベタベタするのが嫌いなので過保護ではないし，うるさく干渉したこともありません。」と話しているが，B子も妹も「お父さんの方が好き」と言い，小さい頃も母親よりむしろ父親によくなついていたようである．

小学校時代のB子はごく普通の子どもで，成績も中の上といったところだったが，中学に入ってからは一流高校といわれている某高校への合格を目指して猛勉強するようになり，その変わりようには両親も驚くほどだった．

後日のB子の話から，実は中学入学直後に近所に住む父方の祖父母を訪れた際，祖母から有名私立大学の付属高校に通う従姉と比較されて嫌味を言われたのが原因だったことがわかったが，B子が何も言わなかったので両親は最近までこのことを知らなかった．

努力のかいあって，B子の中学時代の成績は3年間を通じてトップ・クラスだった．

B子が家の内で暴力をふるうようになったのは，中学の卒業式の直後からである．

志望高校への合格を目指して猛勉強したにもかかわらず不合格となり，しかも流感による高熱のために都立高校の試験が受けられず，ウォーミング・アップのつもりで受けた私立女子高校のみ合格という結果になった．

すっかり落胆して自分の部屋に閉じこもり，心配して様子を見にきた母親に暴力をふるったのが最初だった．それからは，ささいなことに因縁をつけてつかみかかってきたり，「小さい頃，少しもかまってくれなかったじゃないの．本ばかり読んでいて，ちっとも母親らしくなかった。」などといって泣きじゃくったり，「ちょっとしたいたずらにも，すぐに叩いたりして，必要以上に厳しかった」といっては近くにあるものを手あたり次第母親に投げつけたりするようになった．また，母親に電話がかかってくると，話している途中で切ってしまい，それをとがめたところ，今度は母親が大切にしている文献を持ってきて目の前で破ったりしたこともあった．

暴力の対象になるのは母親だけであり，また父親が家に帰っているときには暴力はふるわない．

B子は父親とはうまくいっており，仲良く話したり，妹と一緒によく買物や食事に連れていってもらったりしていた．

母親は，父と娘のそういう関係をこわしたくなかったということもあり，暴力のことは父親には話さなかった．

B子は新学期が始まると高校にはきちんと通い出したが，母親への暴力は相変わらずだった．

そんな5月のある日，担任教師との個人面接があり，大変よい成績で入ったので他の教師達も期待して見守っていること，また成績の良し悪しのみにこだわるのではなく，将来への展望を持って何か具体的な目標を見つけ，それに向かって努力してみるように，などと激励されて，久しぶりに明るい顔で帰宅した．

また，クラブ活動の紹介や勧誘の際に，同時通訳になることを目ざして毎日熱心に英会話の練習をしたり，英字新聞の社説を読むのを日課にしているという英会話クラブの上級生や，税理士の資格を取ることを目標に，授業が終わると経理学校に通っているという簿記クラブの上級生などから話を聞き，将来に向かっての目標も持たずにただ有名校への合格にのみこだわっていたそれまでの自分の考え方を深く反省すると同時に，大いに刺激を受けた．

そして，よく考えた末，高校在学中に英検の2級に合格することを目標として，英会話クラブに入ることにした．また，中学時代には運動部にも入らずひたすら受験勉強をしていたため，体力もなく風邪をひきやすい体質になってしまったという反省から，かねて

からやりたいと思っていた硬式テニスのクラブに入った．そして，同じテニス・クラブに入った３人の同級生と励まし合って毎朝早く起きて始業の40分前に登校し，晴れている日には練習板で30分間の練習を，雨の日には体育館でトレーニングを始めた．

６月に入ってからは暴力もおさまり，担任教師の上手な指導もあって勉強にも余裕をもって取り組んでおり，合間にはテニスの上達法について書かれた英語の本を読んだり，父親から貸してもらったスポーツ医学の本を読んだりしている．

また，毎日必ずラジオの英会話番組を聴き，学校で英会話クラブの仲間と復習している．最近では，中学生の妹もわからないところを教えてもらったりしながら，Ｂ子と一緒にラジオを聴いているという．

次の事例は，家族に肉体的な暴力をふるうまでには至らなかったものだが，家庭環境にも両親の養育態度にも何の問題もなさそうな，むしろ理想的といってもよいように見える家庭にも問題は起こり得るのだ，ということを示すものであり，あえて取り上げる．

〔**事例３**〕

Ｃ男，13歳，中学２年生
父親，47歳，大学卒，大学教授
母親，40歳，大学卒，主婦

Ｃ男の両親は敬虔なクリスチャンで，２人とも穏やかな性格である．

父親は私立大学の教授であり，とても面倒見のよい人である．

外交官の娘である母親は，英語とフランス語に堪能で，趣味のフランス刺しゅうと料理はどちらも人に教えるほどの腕前だが，少しも鼻にかけたようなところはなく，むしろ控え目な性格である．家事の合間に趣味を楽しむほかは，夫と子どもの世話やこまごまとした家事をすることを好み，またそれを生きがいとしている．

両親とも，Ｃ男に対しては厳し過ぎもしなければ甘過ぎもしない．といったところで，Ｃ男を親の所有物ではなく１人の人間として扱い，その自主性を尊重してきた．

Ｃ男はやさしい性格であり，幼稚園でも小学校でも友達から好かれ，教師からもほめられていた．

小学校は家の近くの区立で，６年間を通して成績がクラスで５番以下になったことはなかった．塾にも行かなかったし，特に受験勉強をしていたわけではなかったが，友達に誘われて力だめしにと軽い気持で受験した有名私立中学に合格してしまった．

中学に入ってからも特に変わった様子は見られなかったので両親は安心していたが，２年の新学期を迎えて２週間ほどたった頃から朝になると頭が痛いといって起きられなくなり，学校も休みがちになった．何人かの医師にも診てもらったが，「どこにも悪いところはありません．精神的なものでしょう．」といわれる．

そしてひと月ほどたった頃，頭が痛いといって学校を休んで寝ているはずのＣ男の部屋から，大きな物音が聞こえてきた．何事かと思った母親が行ってみると，Ｃ男が泣きながら教科書や参考書や辞典などを床に投げつけているところだった．この日以降，しばらく物にあたる日が続いた．心配した両親が理由を聞いても，「うまくいえない．」と言うばかりだった．

後日Ｃ男自身が語ったことなどから，次のようなことがわかった．

Ｃ男は，面倒見がよく，誰に対しても穏やかで暖かい態度を変えたことのない父親と誰に対してもやさしく思いやりのある母親を，幼い頃からひそかに誇りに思い，小さいなが

らも「自分もちゃんとしなくちゃ」と思っていた．たまには破目をはずしたいと思うこともあったし，「いや！」と言いたかったこともあったが，何かがそれをさせなかった．それでも，成績もよく，友達にも好かれ，教師からもほめられていることに，内心それなりに満足している面もあった．

そんなC男が，何か勝手が違うと感じたのは，一流中学といわれる中学に通い始めて2カ月もたたない頃からだった．

他人の点数をひどく気にし，一点の差にも神経質になる同級生．勉強，勉強と，まるで駆り立てられるような毎日．小学校時代に塾に通った経験がないのは，C男ひとりだった．あとの皆は，有名進学教室で互いに顔見知りだったといい，共通の話題にも事欠かないようだったが，C男にとってはなんとなく調子の合わない同級生だった．勉強第一の生活は当然，一流大学へ合格することこそが将来を約束してくれる．と信じて疑わないかのような同級生の猛烈な勉強ぶりには，ついていけないものを感じた．小学校時代と違って，心を割って話せるような友達が1人もできず，心の晴れない日が続いた．

分厚い参考書や問題集を何冊もこなしてきた百戦練磨の級友にたちうちできるはずもなく，それまでどおりのペースで勉強しているC男の成績は，低迷の一途をたどった．

級友にもなじめず，成績もふるわず，孤独感を深める毎日．なにもかもがシャクにさわり，尊敬しているはずの両親まで，自分に無言の抑圧を加えている人間のように思えてきた．頭が痛いといって（事実，痛かったのだが）学校を休み続ける自分を叱りもせず，相変わらず穏やかで暖かい両親に，無性にイライラするようになったのである．

両親は，時間をかけてC男ともよく話し合った末に，一人っ子のC男の兄がわりとなって話し相手になり，相談にものってくれるような人を捜そう，勉強はあせらずに自分のペースで続け，気がすすめば勉強もみてもらうことにすればよい，無理に学校に行こうとするよりも，よい機会でもあるから，この際落ち着いて自分の生き方を自分なりに考えてみる方がよいだろう．という結論に達した．

こうして，父親が教えている大学の大学院生であるF青年が，時々遊びに来てくれることになった．C男は，学生時代にはテニス部のキャプテンをしていたFさんからテニスを教えてもらい，FさんやFさんのテニス部の後輩にもよく相手をしてもらいながら，どんどん腕を上げていった．また，Fさんの紹介で，C男の通う中学校の先輩にあたる国立大学の学生で，中学時代にやはりC男と同じように勉強一筋の生活に疑問を持ち，ひたすら勉強に励む同級生にとけこめずに悩んだという青年と知り合いになり，いろいろアドバイスをしてもらうようになった．C男は，ひとりで悩んでいた頃に比べると見違えるほど明るくなり，自分のペースで勉強を続けられるようになったが，まだ学校へ行く気にはなれなかった．

登校拒否を始めて2カ月ほどたったころ，父親の友人から，単なる受験勉強ではなく人間として必要なものの見方，考え方を教え，個性を引き出し，たくましい人間に育てることを目的としているという塾を紹介されて，通うようになった．そして，そこの冬のスキー合宿にも参加し，気の合う，また自分の本当の気持を話すことができる友達もできた．年末から年始にかけての2週間の合宿から雪焼けして帰って来たC男は，2月から元気に学校に通い始めるようになった．

〔考察〕

§事例1～3について

―立ち直る契機に関して―

子どもの問題行動発生要因の1つとなった

と思われる両親のパーソナリティーや養育態度などについて見てみると，事例1では父親のパーソナリティーや両親の不仲，事例2では母親の養育態度および転勤による父親の不在，それに父方の祖父母と母親の不仲，事例3では強いて挙げれば両親の立派過ぎるともいうべきパーソナリティーということになろう．これらが直ちに改善されるなら望ましいことは言うまでもない．

だが，事例1～3の子どもが立ち直っていく経過を追っていく限りでは，両親のパーソナリティーや養育態度が少なからぬ改善を見せたことが子どもが立ち直っていくにあたっての契機となり又それに大きく寄与している，とは言い難い．むしろ，親のパーソナリティーや養育態度はほとんど変わってはおらず，事例1の両親の不仲や，事例2の転勤による父親の不在および母親と父方の祖父母の不仲などの状況は，現在に至るまでほとんど改善されていない．

では，子どもが立ち直っていくにあたっていったい何が変わったのだろうか．それは，本人のまわりの人間関係である．「変わった」というより，「豊かになった」というべきかもしれない．事例1～3のどれを見ても，何より質的に豊かになっていく様子がわかる．

つまり，子どもの問題行動の発生要因の1つとなったと思われる両親のパーソナリティーや養育態度，あるいは両親の夫婦仲などが早期に改善されることが望ましいことは言うまでもないが，たとえそれらがそれほど改善されなくとも，本人をめぐる人間関係が質的に豊かになれば立ち直っていく事例もある．ということである．

§重要な多様な人間関係

筆者は，家庭内暴力児が立ち直るために最も必要なものは，質的に多様な人間関係ではないかと考えている．家庭内暴力児の事例を調べてみると，かなり偏った狭い人間関係の中にいたと思われる場合が多い．また，立ち直った事例を調べてみると，質的に多様な人間関係の中に身を置くことにより，自分が親から与えられていた価値観や役割のみならず，自分と親との関係についても客観的に捉え直す余裕さえ出てくるようになり，その中で立ち直るきっかけをつかんだというものが少なくないことがわかる．

人間関係が広がっていく具体的な様相を個個の事例について見てみると，事例1のように偶然といってもよいような出会いが契機となるものもあれば，事例2のように担任教師の上手な指導や学校生活の中での出会いや体験が契機となるもの，事例3のように両親や周囲の配慮が契機となるもの，などがあるが，他にもきっかけは何であれ人間関係が広がる中で立ち直っていったという事例は少なくないのである．

§是非とも必要な親の側の変化と成長

家庭内暴力児の事例の中には，生活形態ばかりでなく精神的にも，親と子だけで向かい合っているような状況に陥ってしまい，事態も深刻になり緊急を要しているようなものもある．このような場合には，取りあえず親と子が離れてみるという方法を選ぶこともやむをえないだろう．親と離れて新たな人間関係の中に身を置いて生活するうちに，精神的にも落ち着き，自分自身についてのみならず自分と親との関係についても客観的に捉えることができるようになり，やがて立ち直るきっかけをつかんでいく者もある．

だが，一時的にせよ親子の別居もやむをえない，と判断せざるをえないような事例を扱う際に，特に注意しなければならないことがある．それは，親がとても家にいられないようなひどい暴力をふるわれる事例を調べてみると，親のパーソナリティーや養育態度に少なからぬ問題があり，それが子どもの問題行

動の発生の大きな要因となっている．と考えられる場合が少なくないということである．つまり，事態が深刻であればあるほど，親の側にも反省し改めねばならない点が多いということになる．

何10年もかかってつくりあげられた個人のパーソナリティーやそれに基づく面の多い養育態度などを改めることの困難さについては，前にも述べたとおりである．だが，親と離れて生活している間に精神的にも落ち着いて立ち直りつつあった子どもが，家に帰ってくると問題行動を再発してしまう，という事例を目のあたりにすると，たとえ困難でも，親も子どもの成長に見合うような，親としての又人間としての成長を遂げるように努力する必要があることを痛感せずにはいられない．

家庭内暴力児の事例を調べてみると，本人ばかりでなく暴力の対象となる親も，かなり偏った狭い人間関係の中にいるように思われるものが多い．また，立ち直った事例の母親について見てみると，子どもの暴力から逃れる意味もあって勤めに出たりサークル活動などに参加するようになったところ，人間関係が広がって気持も明るくなり，それまでの自分の価値感の狭さや日頃の夫に対する態度，それに適切でなかった養育態度などを反省する余裕さえ生まれ，その頃から子どもの暴力もおさまってきた，というものもある．

これまでに見てきたことから，親も子も人間関係を広げるよう努力することが，この問題の解決にとって１つの重要な鍵になることがわかる．

また，日頃から意識的に人間関係を広げ，またそれを質的に多様なものにするように心がけ，広い視野と柔軟な価値観を持つように努力していくことは，健全な自己概念の形成や役割取得にも役立ち，家庭内暴力のみならず他の問題行動の減少にもつながるであろう．

§学歴偏重を打ち破るには

事例１～３を見てみると，どれにも現代社会の学歴偏重の風潮の影が色濃いことに気づく．

学歴偏重の風潮は，人間を評価する際に，学歴による評価など一挙に覆すような普遍性と有用性を持つようないくつもの評価基準がいまだに見い出されていない．あるいは広く行き渡っていない，というところにも一因があるように思う．

自らの望んだ学歴を手にすることができなかったがために無気力に陥り惰性で生きているかのような人を身近に見ることが多ければ，人々はやはり学歴がないとだめなのかと思うようになりがちであろう．たとえ学歴がなくとも，自らが信ずる道に全力を尽くして胸を張って生きる姿に身近に接する機会が多ければ多いほど，人々の意識も変わっていくのではないだろうか．そのような人がどこにでも見られるようになったときには，学歴偏重の風潮も消えているのではないだろうか．

だが，このような理念ばかりを述べるのみでは片手落ちであろう．まず，自分ができることから始めねばなるまい．とりあえず，大学の教員としての我々にできることは，自らの奉職する大学がたとえ超一流校といわれなくとも，そこに入った学生は誰でも素晴しい教師に出会え，有意義な講義を聴くことができ，生涯の友も得ることができるかもしれないし，とにかく，入学したことを後悔するようなことはないはずである，と胸を張って言えるように全力を尽くすことではないかと思うのである．

☆

引用文献

山田順子：立ち直った家庭内暴力児の事例，日本教育心理学会，第23回，総会発表論文集，1981.

山田順子：家庭内暴力児に関する事例研究，日本心理学会，第45回大会発表論文集，1981.

山田順子：家庭内暴力児に関する心理学的研究，東京家政学院大学紀要，1981.